

GYOUAN × 4WD present
Hozuki ⇄ Hakutaku

触手に支配された電車

囚われの鬼と神に伸びる魔手

おぞましい触手に強いられる痴態

「やあ…っ、あああ…っ！」
容赦ない責めが身体を狂わせていく

実録!!

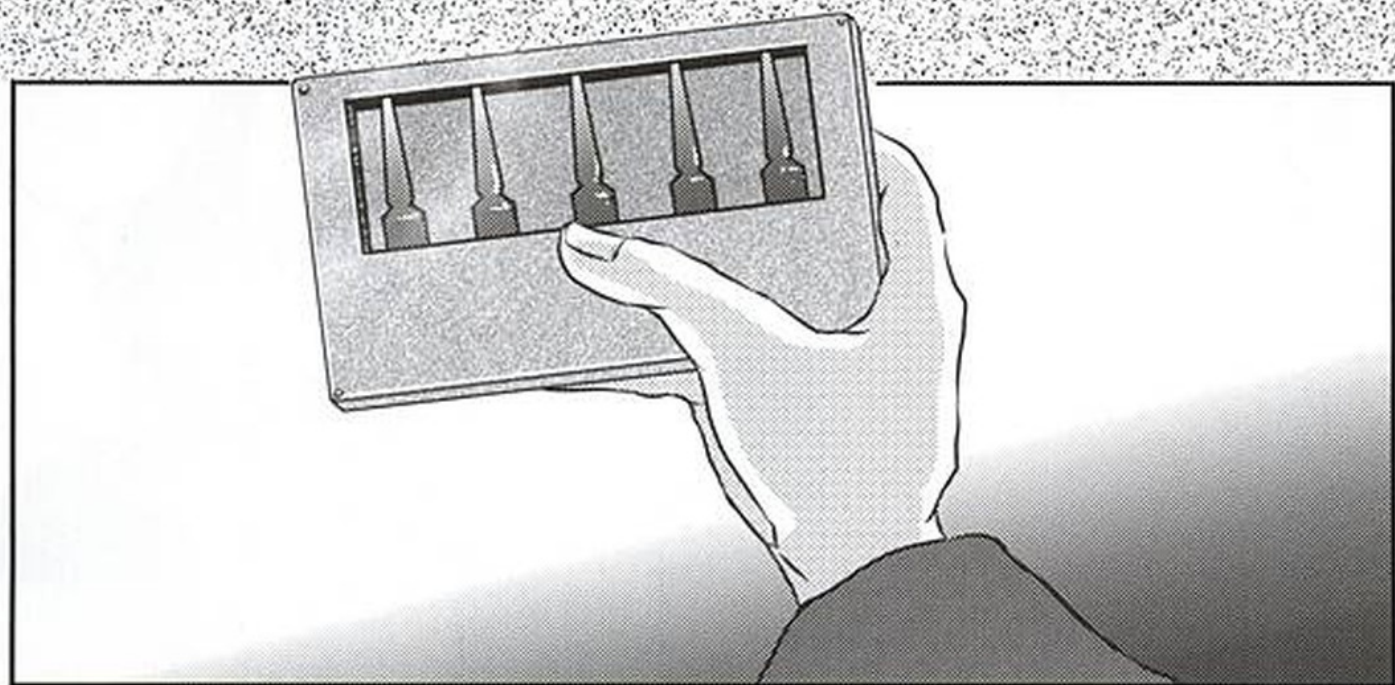
触手痴漢電車 Go!!
極楽行 ⇄ 地獄行

R-18
G



触手事变

ナヴィ





見た目はただの
アンブルにしか
見えませんが



まあ、とにかく
取り扱いには
気を付けなければ

ねーねー君イ

よかったら
僕が送って行くよー

いえ、
彼が待つて
るので…



セッ

キヤア

ふこおっ

いきなり何すんだ
この暴力鬼!!

女の子
逃げちゃっただろ

やかましい!!

目の前で困っている淑女を
助けたままで
烏天狗警察に突き出すぞ
この痴漢神獣!!



失礼なっ

僕は痴漢なんて
卑怯な真似しないぞ

正々堂々誠心誠意
遊んでくださーい

ギャア

ロキッ

指を指すな
指をっ

誠心誠意を一度
辞書で引いてこい



しゅるんっ

イッテエエッ

お前エエッ
逆向いてるだろ指!!

3番乗り場には
電車がまいります

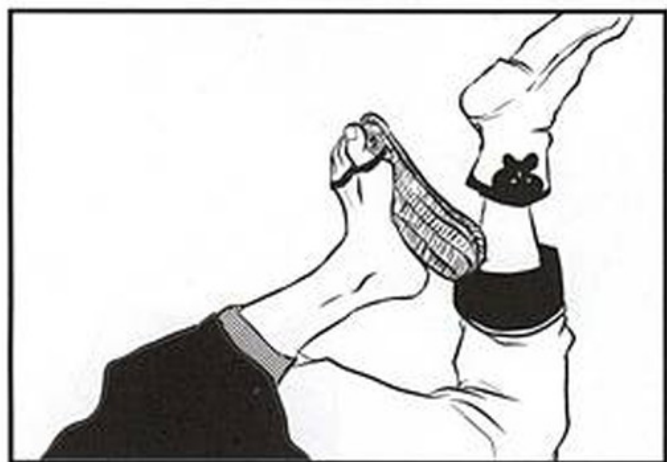
なんです
指の一本や二本

キケンですから
白線の内側まで
お下がってください

全部剪定して
つまようじ挿し木
してやろうか

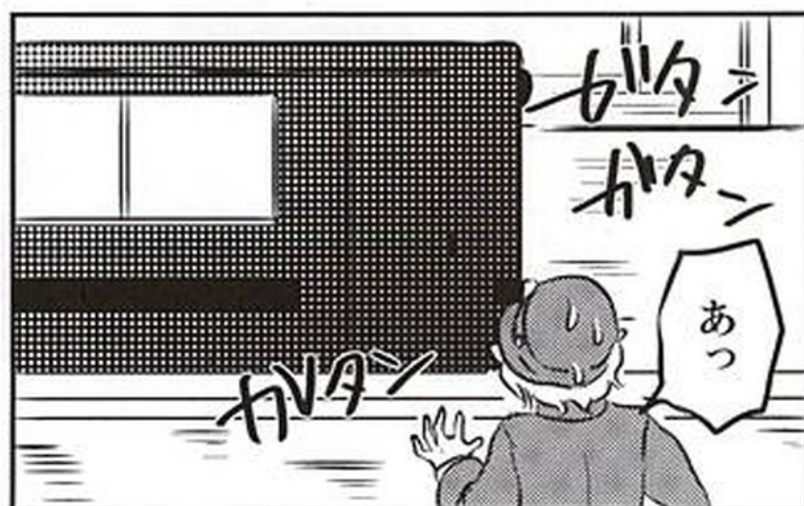
発想が
えげつない

ギャー
ギャー
ギャー











なっ
何やってんだよ

お前だったら
金棒で振り払える
だろ

どこぞの発情豚の
臍に使用して
しまったもので

それに…

あいにく金棒は
ホームに落として
きてしまいました

うわ

んやんやん

うわ

ぎゅぎゅぎゅぎゅ
びゅびゅ

がっ
びゅ

んやん

うわあ

なんて再生力

これらは新しく阿鼻で
呵責用に開発された
生物兵器です

まだ試作ですが

鬼の力を以ってしても
簡単には始末できないよう
改造してあります

ちなみに

金魚草似髣髴虫・
ドスケベタコをベースに
各種さまざまな地獄産の
生物の遺伝子を培養し
掛け合わせています

まあ結局
いますぐどうこう
できそうにも
ないので

名付けて

触手アクメ快樂地獄

なんだよそのエロ同人の
タイトルみたいな呵責

まあ分かってもらわ
ねえから仕方ない

わっ!?









楽しめって言ったの
お前だろう？

一緒に堕ちようよ
官吏様♡



チッ
コノヤロウ

なんだかんだ言って
ノリノリじゃねえか

快樂地獄に





順応力高過ぎ
なんですすよ貴方

んー
なあに？

これだから
ケモノはら

だつてさ

すごく
イトコ触つて
くれるんだもん

お前だつて
気持ちイイ事
好きだろ？



















この親玉の目的は
多量の精気を吸収し
繁殖する事です

獲物に対して
凌辱に凌辱を重ね
精気を放出させ
それを糧として
卵を産み付けます

そして
獲物の体内にて
卵を孵化させ
産まれた稚児に
再び獲物を凌辱させ
更に精気を糧にして
成長させる

いわゆる
苗床産卵という
やつです

なにそれ
エグい

亡者だと死なないので
本当に永遠の苦しみですよ

待つて

それ、僕たち
やられそうなんだよね？

はい



やだ...っ

ガッ

ゆーっ

もうあああ

しん

クーン







う……あ

あ……あ

う……

いたぞーっ

い……

お2人とも
大丈夫ですかっ

馬鹿！ ばか！！
バカ——！！！！

お前、
アレに繁殖能力ないなら
最初から言っとけよ！！

死ぬかと思っただろっ！！

馬鹿とはなんです
偶蹄類

だから大丈夫だと
言っただでしょう
サンプルだって

だいたい、お前
死なねーじゃねえか

死なないから
辛いのだ！！

そもそも危険なモノを
素手で持ち運ぶな阿呆！！

しつこいですね

それは
謝ったでしょう

あんな目に合ったのに
ピンピンしてら

鬼神と神獣の
回復力ハンパねえな

ギャー

ギャー

ギャー

まあ、でも何事もなくて
良かったじゃないスか

だって…

下手したら今頃
化け物を胎の中で育てていた
可能性だってあるんでしよう？

本当だよ
もうあんなの二度と
ゴメンだし
ましてや化け物の
子どもなんて

うんっ

どうせ産むなら
コイツとの子の方

が

はっ

ほお

子が欲しいか
そう言いな

とりあえず
今から寝室
行きましよ

ヤダっ
それなら
産ませる

勝手にやつ



口絵 Q子様

初めましてQ子と申します。

この度は鬼徹触手本の発行おめでとうございます！触手本と聞いてきつとこのお二人なら素晴らしいエロスを生み出して下さるだろうと確信して心待ちにしておりました！やはり触手には沢山の夢が詰まっていますね。大変恐縮な事にまさかのカラーでゲストページを頂いて光栄に思いますお声を掛けて頂いて有難う御座います！素敵な作品を有難う御座いました！！



漫画 ナヴィ

触手が好き!!痴漢モノが好き!!

じゃあ一緒にそれで合同やりましょ!!せっかくだからG指定も付けちゃいましょー!!という、軽いノリからこの一冊が出来上がりました。ひたすら欲望に忠実に描けめちゃくちゃ楽しかったです。ふらのさんの小説、Q子の口絵と共に楽しんで頂ければ幸いです(はーと)



小説 ふらの

触手は…いいものですね…

以前から触手好き、しかもガチガチの苗床Gが好みだったんですが、思いがけずこの性癖を共有・昇華してもらえることに相成りまして、狂喜乱舞しながらやらかしました！鬼様と神獣様だから大丈夫！（スローガン）思う存分可愛がられて幸せでした！Q子さん、ナヴィさん、そしてお手にとっていただいた貴方様に最大限の感謝を込めて。

愛し憎しのあいつと嬉し恥ずかし新婚旅行に出かけた

先で予想外の事件が起きた！

え、嘘、触手化した金魚草に捕まっちゃった！？

僕たちどうなるの？？

粘液と植物塗れの電車内！

吊り上げ丸呑み苗床産卵、恥辱の植物電車！

※タイトルです

あらすじ

じゅうかんちゃんという拙作既刊本のふたり設定になります。

セフレからうっかり番になっちゃったりバップルです。

補佐官も黒い毛並みの獣型になれます。

しかし今回リバ要素は薄く、全編を通して触手×鬼灯、触手×白澤なのでご注意ください。

過度のグロ、嘔吐や丸呑み、ボテ腹産卵描写がございます。

しかしギャグです。ギャグなんです。多分。

あの涼やかな声で褒められると、天にも昇る心地だった――。

日当たりのいい、明るく暖かな温室の日溜まりで微睡み、彼は夢を見ていた。

ここは環境よく整えられ、囲われた箱庭で、希少で華麗な花々が咲き乱れる楽園である。

彼には愛でられるための広い区画が与えられていたが、彼が憧憬と共に夢見るのはこの楽園ではなく、彼本来の居場所であった。

けふるような生温い風に混じる鉄と血と火の粉の香り、群れでさざめく仲間たち、暗い天、乾燥した地、日に一度降り注ぐ、恩恵のような慈雨。

水滴の向こう、バケツシャワーを掲げた仏頂面の黒い鬼に、スウ、と目を眇めて見詰められる瞬間が何より彼は好きだった。

その場所からほとんど移動できない身なれども、群生する彼らの――群れの主とも言える

かの鬼を噂する密やかな声はそこかしこから聞こえていた。もちろん、彼を含めた同種族の群れたちの囁きだ。ひとには理解できなかった。

その黒い鬼を良く思っていないモノも確かにいたが、彼は――地獄を夢見る温室の金魚草は、それはそれは黒衣の鬼、地獄の第一補佐官を崇拝していた。

かの鬼の意に沿うように、大きく美しく育ち、ずっと鬼に愛でられて共にあった。そんな風に育てば食用にも薬用にもなり得る。

一つ間違えば刻まれ、すり潰されていたかもしれない運命をも回避したその金魚草は、とある日、その鬼の変化に気づいた。元の彼ではない獣臭と気配がまわりついている。

ほんの僅かな、でも彼からしてみれば確固たる違いに、大きく重くなった身体を振り立てながら訴えたが、彼はひとの言葉を紡げなかった。少し小首を傾げられて終わる。

そのうち、かの鬼と一緒に、白衣の男がやってきた。その男は群れを検分するように眺めて何事か、連れ立っていた鬼に話す。何やら親密な雰囲気だった。

そんな事があって数日後、成績のよかった金魚草が大勢、天国に貰われて行くことになった。

先日にとある薬剤師が発表したサプリメントなどの効果・効能が評価されて、金魚草を求める天国関係者が増えたのである。

選ばれた中には彼、――かの金魚草も含まれていた。

拒否権もなく、鉢植えに移し替えられて連れてこられた温室。そこには好事家な主が、様々な場所から求めてきた植物が植えられていた。

その中に植え替えられた彼は辺りを見回す。周りには天国のほんの僅かししか自生しない品種や、現世で生まれる特殊種や、地獄産の食虫植物など珍しい植物が整然と植えられていた。

それぞれの特徴に沿った適度な温度管理、水も間断なく与えられ、肥料としてキチンと餌が与えられる。絶え間なく世話役の天女が訪れ、植物たちの手入れをしていた。

ある種、最高の楽園だったろう。

乾くことも餓えることもなく、繁栄を享受できさる。

けれど。

彼は諦めきれなかった。

あの暗い世界、熱い空気、そして黒い珠玉のような、背中。絶え間なくそれが夢に現れる。彼が唸りながら、茎の上で揺れた。

気づけば彼は、バインドしながら他の植物を引き寄せていた。木を、草を、花を、その大きな口に閉じ込め、吸い込む。

ぼくん、と飲み込むとその金魚草のランチュウに似た頭部がドクリ、と跳ねた。

じたんばたんと暴れる中身と闘い、吸収し、悶える。ポコポコと身体表面が波打ち、金魚草は断末魔の悲鳴をあげた。

その猛々しい叫びと共に、金魚の胴体部分から太い幹が飛び出した。うねうねと伸びる幹に葉と蔦が瞬く間に生い茂っていく。先端から色とりどりの花と小さな金魚草が咲き、荊棘が伸び、混沌とした緑の塊になった。

その真ん中に主母体になった金魚草は鎮座していた。意識がはつきりとしてきた気すらする。彼は、二股になつてゐる幹の片方を差し伸べた。それは意思によつて滑らかに動く。蔦も、荊棘すら意のままに動かせるようになっていた。振り子のように揺れて進むだけではない、葉と根を使つて進める。

それは、彼の衝動をさらに突き動かした。どうしても帰らなければならない。かの鬼に会うために。

そうして集合体になった彼は、温室を、天国

を出奔するために逃避行を始めた。幸いそこは管理人はいるものの主の別荘であつたため、厳重な警備等はなく、緑の塊が遁走するのに特に問題はなかつた。

誰もこんな状態で金魚草が蠢くとは思つてはいまい、ましてや天国、ちよつと不気味な木が動いていようが咎める者などないのである。

彼は逃走手段を物色した。

天国といえど広く、地獄までは遠い。境の門まで行け、大きな図体の彼がそれほど目立たない、手段。

天国でも郊外のその温室から離れ、彷徨う彼の目についたのは、枕木。

いつぞや赦されぬ禁断の恋に落ちて逃走した者が捕まり、ジュースにされてしまった番の彼らと同じ——トロッコではないが——、線路とそこに止まつた電車だつた。

天国にも公共機関はある。しかし滅多に使われない。

中でも鉄道は駅舎も古く、レンガ作りであり、電車も最新鋭のものではなく長年使われて鄙びた風情を漂わせていた。流石にもう、蒸気機関車でないだけ、天国にしては最新鋭なのかもしれない。

そんな鉄道も細々と穏やかにつつがなく運行されている。鄙びた駅舎にはとりどりの花が花壇に植えられて、天国らしいどこか懐かしさを醸し出す風景だった。

そのどこか穏やかに時間が流れている天国鉄道の駅、約束したその場所で、そわそわと白澤は待ち人を首を長くして待ち侘びていた。

いつもの古銭朱紐のピアスはそのままだが、トレッドマークの三角巾と白衣の給食当番ではなく、裾に葛と花が意匠化された白いシルクのロングチャイナを纏っている。下は動き易い黒のクロップドパンツといつもの白い短靴を履いていた。

現世へいく格好とは雲泥の差だが、何も言わんやこの格好をチョイスしたのは極楽満月の弟子という名のお母さんである。

旅行用のトランクを脇に置いて、通りすぎる

女性に手を振っていた。しかし、声を掛けようとはしていなかった。ここに白澤の知り合いがいたら、すわ天変地異か、と恐れ慄くような珍事であった。

義務のように笑顔を向けてはいるが、どこか上の空である。通りすぎる者も少ないので、そんな白澤の様子を咎められることはなかった。

待ち合わせには少しだけ早い。しかも先ほど連絡で忙しいから遅くなるかもしれないと言っていた。

天国住民は元来、亡者以外は空を飛べたり、羽衣を使ったり、瑞雲で移動したり様々な移動方法がある。

公共機関を使うものは少ない、だが使用する者も無きにしも非ず、だ。今回待ち合わせして出かける相手とは、電車で移動する、と話が決まっていた。日頃忙しない相手にとっては、ゆつくりと過ごせる移動手段は最大限の譲歩であるのだろう。

手持ち無沙汰に街路樹に寄りかかり、白澤は足をブラブラさせていた。

今日も今日とて天国はうらうらとしたいい天気だ。抜けるような青い空である。そんな気持ち良い日なのに、楽しみにして浮かれているの

は自分だけかもしれない、などという若干の不安が今更出てくる。それも悔しい。

白澤が悶々とした頃、静かに白澤に近づく足音があった。

単衣の小紋を羽織り、中に白シャツ着て、袴に齒の薄い下駄を履いた背の高い鬼である。

小さなポストンバッグを片手に下げていた。

古風で、実に風情のある駅舎に似合う。そしてその左耳の耳たぶには、仕事か休みの日にしかつけてくれない、白澤と揃いのピアスが飾られていた。

カロン、と軽やかな下駄の音に白澤は気づく。その音は、じつと待っている白澤の少し手前で立ち止まった。

「……」

「……」

お互いにお互いを間合いに入れながら、どうするか悩んでいるような沈黙だった。鬼灯もどこか落ち着かない様子だった。

ふたりの間には、いつもであれば金棒でご挨拶のちの怒鳴りあいがあるが、流石に鬼も長年の相棒を持つてきてはいない。姿から、様子から、相手も気合入れてきたことは明白だ。先に焦れて声を発したのは白澤の方だった。

「……取り敢えず、行く？」

「ええ」

白澤も待つてはいたのだが、何となく面映ゆい感じで目も合わせられない。わざわざ外で待ち合わせて、なんて少し前までは考えられなかった。一言答えてさっさと駅舎に行ってしまう鬼灯を追いながら、白澤はその背中を何とも言えない心持ちで見詰めていた。

なんだかんだでセフレから、なし崩しに番になって初めて、ふたりで遠出をする。

日本地獄は鬼灯が知り抜いているので、今回は天国でのんびり電車で移動し観光することになった。

ぶらぶらと、目的を持たない旅だ。

忙しい鬼灯がそのために休みを取っている。

その点だけあげても、白澤と同等に楽しみにしていることは自明の理なのだが、なんとなくお互いに言い出せてなかった。

駅舎のなかに入っても鄙びた鉄道である。

駅員がぼつん、とひとり立っているだけの駅舎の中なので、男がふたり。当面の目的地までの切符を買う。電子マネーが使えない、昔ながらの券売機である。

鬼灯が懐から財布をだし、札を抜いて切符を二枚買った。

「白澤さん、はい」

「あ、うん」

何気なく一枚手渡されて、白澤はそれを受け取りながら札を言うか悩んでいると、さっさとホームに入っていく。自然な様子に何故か負けた気がして、若干ふくれっ面しながら白澤は後を追いかけた。

止まっているクラシッくな茶色の、コロんとしたフォルムの車両や、柔らかに年を経た内装を立ち止まって眺めている鬼はどこか楽しそう。一両しかない列車の中をもの珍しそうに見ている。

利用する者が少ないのでせかせかしたダイヤ編成ではない。まだ列車が発車するまで間があった。急ぐ必要もない。

鬼の背中を眺めつつ、こんな風に出掛けるなんて、と何故か白澤は胸がざわめくのを感じた。

不整脈か、と胸を抑えると、ふと鬼が振り向いた。ドキッとする。そんな白澤の様子に不思議そうな顔をした鬼灯は小首を傾げた。

「この車両、水面を走りますかね」

「は？」

首を斜めにしながら発せられた言葉に、呆氣にとられて白澤は口を開けた。

「七つ目の駅は沼の底かもしれません」

「……ああ、あの映画」

ジブリの、顔のない化物と少女とお供が乗り込む電車の話か。得心がいく。

拍子抜けして白澤は肩を落とす。何やつてるんですか、と言わんばかりの鬼灯はさっさと電車に乗り込んでしまった。

それを追いかけてレトロな車内に足を踏み入れる。

席は横に伸びる赤い対面型のシートに木目調の内装で、窓が多い車内は光が溢れている。ふんわりした座席はビロード張り。吊り革が並んでいるが、それほど使われてはいないようで磨り減ってはいない。

白澤と鬼灯以外に他の乗客はいなかった。

長椅子の真ん中あたりに陣取った鬼の隣に座るか否かで白澤が悩んでいると、ボンと鬼灯が席の隣を叩いた。渋々といった体で白澤は少し離れた場所に腰を下ろす。

やがて、静かに電車が滑り出し、かくん、と体が小さく横に揺れた。微妙な距離を置きながら電車に運ばれていく。数駅を過ぎたところで、

鬼灯がおもむろに声をだした。

「あんまり緊張されるとこつちも変な気分になりますよ」

「ぼ……き、緊張なんかっ！してない」

無表情で前を向いたまま言う鬼灯に身を乗り出して白澤は喘みついたが、少し息を飲んで、はあとため息をついて座席に沈み込んだ。

「……だって、こんなの初めてじゃないか」

「そうですね」

「お前と待ち合わせて出掛ける日が来るなんて、ね」

「今回が始めてですけどね、」

これから度々あるんですから慣れてください。

つらつと言う鬼灯の言葉にバツと白澤は振り向いた。鬼は白澤を見ないようにそつぽを向いているが、僅かに顔を歪ませている。

ほつたを膨らませて、白澤は笑いを堪えて

口元に手をあてた。

「なに、実は照れてんの」

「うっさい」

「くっさ、くっさいセリフ」

「これくらい言えないから貴方モテないんですよ」

「はー？モテるし、僕」

「はいはい。いつも格好も同じなのに、今日に限って気合入れてきてるのはどうゆうことだ」

「それそつくりそのままオマエに返すわ」

ぎやいぎやい言い争いしている内にまた数駅が過ぎて、新たな駅に近づく。突然、ガクンと電車が急停止した。お互いの肩がぶつかる。チラ、と視線が交わるが何も言わずに立ち上がる。

目の前に駅がある、が、しかし、少し手前でなぜか止まっている車両があった。誰も乗っていないようだ、扉はピッタリ締まっていた。

「特に何もなっていないようですが……、事故ですかね」

「さあ？」

ふたりで覗き込んでみると、運転席から恰幅のよい運転士が降りた。駅のホームで立ち尽くしている駅員たちと、話に行ったようだ。

やがて取って返してきて、入口から鬼灯と白澤に会釈する。深い帽子にすっぽり包まれて、顔が見えない人物だった。

「ご迷惑おかけしております。原因不明なんです。うで……点検しに駅員が外に出たら、扉が閉まってしまふ戻れなくなつたそうです」

取り敢えず荷物を持って降りてください。

そうお願いされて白澤は頷く。その隣で鬼灯が、復旧見込みはありますか？と聞いた。

「原因さえ分かれば」

「……金棒持ってきて来れば良かったですね」

「扉壊す気かよ」

「手っ取り早いでしょう」

そう言いながら荷物を片手にホームに降り立つ。数名の駅員が止まってしまった車両を睨んで話し込んでいた。その内のひとり、おそらく止まってしまった車両の運転士だろうか、よく見えなかったが何か踏んだようだった、と細々と話していた。

「あ、おい」

つつつ、と鬼灯が止まっている車両に寄っていくのを見咎めた白澤が慌てて、その後を追いかける。

お互いに物見高い性格をしているが、元来白澤は面倒は苦手だ。何にでも顔を突っ込みがち

な補佐官様とは違う。

興味津々で鬼灯がひよい、と窓を覗き込むと、

小紋を纏った鬼の腕が、内側の天井からぬつと伸びてきた太い緑の、植物の蔓に絡め取られていた。

鬼灯はキョトン、と腕を見た。白澤のほうが先に声をあげる。

「植物？」

息もつかせず腕から胴体に伸び、しつかり巻き付いた蔓が、二センチの体軀をものともしないで持ち上げる。気づいて抵抗する前に、鬼の身体が窓から吸い込まれた。黒髪の最後の一筋までずりりと取り込むと、それまでピクリともしなかった電車の車輪がゴトリと鳴る。

死んだように停止していたその車両が勝手に動き始めた、鬼灯を乗せたまままで。

「つ、え、なに」

呆然と。

白澤は遠ざかっていく電車を見送る。駅員たちもぼかんと立ち尽くす程の早業だった。しかし衝撃が過ぎ去ったあとは集まっていた全員が我に返って慌てだした。

「今のは何だ！」

「お客さん！ お連れさんが！！」

「は、」

一番近くにいて攫われた鬼の片割れに声をかけた運転士は、放心していた白い男の口からバツカじゃねーの、と音が漏れるのを聞いた。

男——白澤の、そこからの行動は迅速であ

った。二人分の荷物を駅員に押し付けると、ひらりと白い獣に変幻し、飛び立つ。

空中を蹴ってぐん、と加速した。

止まらないまま加速して猛スピードで走っている電車に、なんとか追いつき横付けて中を覗き込む。特に変化のなかった電車の内側が様相を変えていた。

内装を隠すほどの緑の森だ。

天井から鬱蒼と茂る緑の幕が垂れて、その真中にいる鬼が、何故かうつとりした風情で自分に絡んでいる蔓とその先にある花に触れている。無事でいる姿をみてホッとした反面、何やつてるんだ心配したのに！と腹を立てた白澤は、カンカンカンと金属の窓枠を蹄で叩いた。音に気づいた中にいる鬼灯が、窓の外の白澤を見た。目が合う。しかし、ふっと鬼灯は目をそらした。明らかに白澤に気づいているのに、である。

その態度にムカつと白澤は腹を立てた。

「ばーか！ 何やってんだよばーか！」

ビュンビュン流れていく風景をバックに、風にふさふさした毛並みをバサバサと煽られて大声で叫んでいる神獣が目に入っているはずなのに、黙殺される。

意地になって白澤は更に外装をカンカンカンと蹄で蹴った。

「……チッ」

顔を背けているが、横顔ですらものすごい凶相で、鬼灯は外に向けてシッシツと手を振った。が、白澤は食らいついていく。

その騒ぎに気づかれぬはずがない、先ほど鬼灯を取り込んだ割れた窓から、ぬるつと蔓が白澤に伸びてきた。

「うわっ」

シュツと伸びた蔓の一撃から、何とか身を振って避けた白澤の後方から別な蔓が伸びる。

「白澤さん！」

「なに、おわっ」

鬼灯が叫んだ。が、しゅるしゅると間髪入れずに蔓が目標の白澤を捕らえる。胴の六つ目を巻くようにギリギリ縛り上げると、その巨軀をぐいぐい中にむけて引っ張った。

「うわ待って、入らないっていうか無茶するなアア」

蔓に絡みつかれながら、じたばたと前足で空気を掻く。しかし、白澤の抵抗より植物の引き込む力が勝った。

ばしゃーん、と一枚ぶんの窓と窓枠を割って、

白澤が中に転がり込んだ。

転がり込んだ瞬間に、身体は人型に戻っていた。依然として葛は胴体に絡みついたままであったが。

その様子を、緑の無数の触手に絡まれた鬼灯が呆れた気味にねめつけていた。

「まぬけ」

「喧嘩なら買うぞクソ鬼イ！」

「……はあ……、なぜ来たんですか、放っておけば良かったのに」

「そんな訳にはいかないだろ！ えっ、なにこれ」
理不尽なことを言う鬼灯に睨みを効かせてから、自分の胸に巻き付いている葛の根元を辿って見上げた白澤の視線の先には、緑と茶色のまだら模様の太い柱があった。

おそらくこれは幹であろう。そこからうねうねと生えている緑の葛が、白澤と鬼灯の周りで不意な蠕動を繰り返しながら踊るように蠢いていた。この太さもまちな枝——蔓や葛は、数百はありそうだ。

そのひとつひとつに色とりどりの小さな金魚草がたくさん生えていた。金魚草でない、普通の花も生えている。コブの生えている葛、細い蔓、トゲトゲの葉。全てがゆらゆらと揺れている。

た。

様々な緑の集合体の中、幹の一番上に一際巨大な、主母体のような金魚草があった。その身形は元は一般的な金魚草だったのであろうが、今はポコポコと瘤が隆起しており、様々な植物と接続されている。口元からは金魚草の鳴き声とも言えない奇妙な音が漏れ、大きな目玉は天を睨んで虚ろだった。

それを先ほどのうつとりした視線で見詰める鬼灯に、白澤の口元は引き攣った。

こいつ、まさか。

「素晴らしいでしょう？ 金魚草が何故か他の植物と融合したようで……、こんな事例は初めてです」

「えっ嘘だろ、気持ち悪いよこれっ」

やつぱりか、と思いつつ、白澤は噛み付いた。鬼灯の金魚草に対する愛はどこか突き抜けている。そんな憤りなど何処吹く風な莫迦に更に言い募ろうとした白澤は、足元に締めつけを感じた。ギョッと振り向くと、ずるずると這ってきていた太い葛に厳重に拘束されているところだった。

あ、と思った瞬間に、足に絡みついた葛はあつという間に白澤を吊り上げていた。

「嘘おお」

天井からぶらんぶらんされる白澤。

それを横目に、鬼灯は金魚草に話しかけた。

「それに用はないでしょう、さあその窓からポイしてください」

「あ、コラ」

微細に震え続ける巨大な金魚草に向かって空いてる窓枠を指し示し、交渉に入る鬼灯に、吊り上げられながらも抗議しようとした白澤は強い視線に睨みつけられる。

黙ってろ、と言いたげだ。

ささ、どうぞと白い手のひらが閃く。その手の動きを目で追う金魚草はおぎやあとも、ぐえええともつかない声で鳴いた。

鳴き声に呼応したのだろうか、つつつ、と伸びた葛が白澤を殊更絡めとり、首を巻き取って絞めあげた。

「ぐえ」

白澤の潰れた悲鳴を聞いて、グツと腕を引いて葛の囲いを抜けようとした鬼灯を、更に太い葛が覆う。鬼灯は眉を顰めた。いつもより、力が入らない。引きちぎって抜け出ることができなかった。

「……まさか」

ぎょえええ、と金魚草らしからぬ叫びを上げた主母体に呼応して鬼灯を囲んでいた葛が、太く張り出した幹の根元に彼の身体を引き込んだ。大量の葛と幹と葉に囲まれて、袴をまとった下半身がちり固定される。

「……っ」

押しても引いても動かない、彼の身体にいままでも僅かに染み出していた樹液——粘液が振り落ちる。

鬼灯が金魚草に埋め込まれて下半身固定されている内に、白澤は葛に後ろ手に拘束され、ぐるぐる巻きにされていた。胴体の目の部分をピンポイントで覆われていて、もやつとする。

足だけで吊りあげられた状態からは大分マシにはなったが、状況は良くない。

動けない彼の口元に、しゅるると細い葛が降った。

「うええええ」

叫んだあとと固く唇を閉じて口内に入れさせない白澤に、葉のついた葛も降ってきて鼻を塞ぐ。空気の侵入口を塞がれ、ぶは、と開かされたそこに細い葛が引っかかり、さらにコブのついた葛が侵入した。

白澤の口の中に侵入した瘤はムズムズと蠢き、

先端が裂けてぼんと花が咲く。その赤と白の毒々しいほどの花卉の中心から粘液がとろりと垂れた。

「あつま」

白澤は呻く。その濃密な花からの蜜が直接喉頭を伝い、嚥下されるとカツと体が熱くなる。むせ返るような香りもその効果を上乘せしていた。

（これ、ちょっと……おかしい？）

喉元を掻きまわりたいが、括られている手が動かない。飲まされ続けた粘液が胃に張り付いている感すらする。それが、何故か例えようもない熱を孕んだ。

悶える白澤に、固定された幹で多数の花に擦り寄せられ頭を振りながら、鬼灯が呼びかけた。

「白澤さん」

「う……熱い」

「——そう言えば、金魚草の効能は滋養強化でしたわ」

それだけで説明がつくのだろうか。

白澤の髪をかきあげて小さな葛が垂れ下がる。探るように頭部をマッサージしながら耳朶をつたう、垂れ下がる耳飾りをもてあそぶ。

「ん、んんっ」

たったそれだけなのに気持ちがいい。

「あつ」

とろりと背中に樹液が垂れた。

とろとろと背筋を伝って脇腹に回り、腹側に落ちていく樹液の順路に沿って、繊維の端から溶けて細切れになった衣類が一緒に流れ落ちていく。しかし、白澤の肌に痛みはない。

その粘液は不思議と肌は傷つけないが、服だけを溶かしていつて、るようだった。

「なにこれ溶けてる！」

「食虫植物が混ざってるんですかねえ」

若干のんびり言う鬼灯に、早く何とかしてえと白澤は暴れた。

「しかし私も捕まってるんで」

いかんともしがたいです、と返答。

「お前なら何とかできるだろ！」

「それが」

口ごもる鬼灯にハッと白澤は思いついて叫ぶ。
「オ？エ！！この金魚草、傷つけたくないだけだな！」

切れ長の瞳を見開いた鬼灯は、それ以外はほぼ変わらない無表情で呟いた。

「ぎく」

「口で言うな口で！このポケナスうううう」

「あつ、私いま傷つきました、とつても。心が痛くて動けない」

「嘘つけええええ」

じたばた藻掻く白澤の動きとともにチャイナ服全体が、つるりと床に落ちた。

粘液と服の残滓のぬめりに乗って、するすると葛が剥き出しになった白い肩に摺りつく。肩口を、背中を這う葛に、ビクビクと白澤の肢体が跳ねる。

ゴツゴツと尖っている角の名残を、ツンツンと葛の先端がつついた。細めの柔らかな毛の生えた蔓が、同時に脇をくすぐる。胸筋を辿って、剥き出しになった小さな胸の先端を、細いくだがくるりと巻いた。

「あつ、ああつ」

粒を抜いて搾りだすような動きに、白澤は目を閉じて悶えた。そこはすっかり相手に開発されている部分で、どうしようもなく快楽を拾う。

ぶくり、と膨らみ凝る乳首に、頭が肥大してぶつくり膨らんだ葛が忍び寄っていた。かばりと開いた真つ赤な中身のその口には、柔らかな絨毛が生え揃っている。避けようもなく、その葛が二本、白澤の薄い胸を包んだ。

「んうっ」

柔らかな絨毛に包まれて、乳首ごと胸がやわやわと揉まれる。それが、思ったより深い官能を呼び起こして、ズクリと白澤の下半身を震わせた。

「嘘……、冗談じゃ、な、」

元々快楽に弱いのは自覚があるが、これは早すぎる。原因は他にもありそうだ。最初に飲まれた粘液が、身体を熱くする以外の何らかの作用を起こしているのか……、何にせよ、こんな拘束をされたままずっと責められたらどうなるか、なんて想像もしたくない。

「や、や、ヤバッ」

「ほ、……ほお」

焦りの余り、番になってすら減多に呼ばない相手の名を呼ぼうとして、白澤の頭部は仰け反った。後頭部の髪が、何者かに引っ張られている。

視線だけを動かして後ろを覗くと、胸に吸い付いているものよりさらに大きく肥大した頭を持つ葛の口が、ニタリと絨毛を晒しながら三日月型に笑みを浮かべていた。

「ひっ」

パクッと白澤の頭部はそれに食まれた。ぬるぬるした感触が頭の全体を包む。額のみ

ならず目元まで包まれて、必死に閉じた瞼を絨毛が滑り、睫毛までしゃぶられる。

その感触に背筋が泡立った。

怯え固まる身体に反して、耳元を触手状の絨毛が掠り、それすら快楽を拾う。気持ちいいのか、気持ち悪いのか。否定したくて拒否したくて頭を振り立てた。

「い、いいい嫌だつ、これ取って！ 取っ、ひうつ」

「白澤さ、ぐっ」

「ほおずき！」

番の、白澤を呼ばわった声が不自然に途切れた。思わず躊躇った名を叫んだが答えはない。粘液にまみれた衣服と蔓で身体が目も封じられた白澤からは、相手の状態を何も感知することができなかった。

ジタバタと暴れる腰に、遡るように細い葛が這っていく。

「うわわっ」

意思に反して、下半身が反応している。怯え、震えながらも勃ち上がり半立ちになっているそこを、するりと蔓が撫でていった。

どこから葛がくるか分からない状況だと、鋭敏になった目以外の慣らされていない感覚が、

ほんの僅かな蔓の動きにも全て反応してしまう。
不安が、増大していく。

真つ赤な口にずぞぞ、と胸と頭部を吸い上げられて、白澤は悶えた。感じてしまう。そのことに狼狽する。この追い詰められる不安が、余計に劣情を煽るだなんて認めたくない。だが、既に兆した白澤の陽根は、先走り垂らし始めている。

膨らんだ股間に蔓が取り付いた。

くるりと上から下までを巻きとって、全体を絞り込むようにシゴキだす。べらぼうな快感に、白澤は狂乱した。

「こんな、こんなの、おか、し……、ひゃあ」

上から下まで、と下半身に粘液が振ってくる。その冷たさが、溶け、滑り落ちていく衣服の感覚が、白澤の肌を燃え上がらせた。露わになっ
ていく臀部を、半勃ちの陽根を、複数の蔓が突きまわしている。

「や、や、だめ、」

ぶるん、と出てきた白澤の力り首に何か被さった。その柔らかなものに包まれる感覚で、頭と胸に取り付いているものと同じものだと理解する。

複数の蔓に、弾力のある突起に包まれ、擦り

上げられていく。連動するように乳首も吸われ
て、白澤の腹が引き攣った。

「や、め、やめ……、なんか、へん、だからあ」
吐精に至るまでの強い刺激ではない。だけど、高められていく。コスコスと重点的に力り首がこすられて、一気に放埒感が高まった、しかし、白澤は飛び出てこない。

「んっ、なん、で」

ひっ、と仰け反り喉をヒクつかせるが、一向にその意味での逐情は訪れない、代わりに下腹に現れたのは、尿を漏らしそうなむず痒い衝動。

「あつ、やだ、やだ、おしっこ、漏れ……」

いやいやと足をバタバタさせている白澤の、両の太腿にも太い蔓が巻きつく。腿とふくらはぎを畳んで固定されてしまえば、そこからはもう絨毛の独壇場だった。一気呵成に擦られて、開けっ放しになった口から涎がこぼれ落ちる。

「やっ、……あ、あつ、あつ、ああつ！」

ぶしっ、と音を立てて、何かが出された。絨毛の内側に透明な液体が溜まり、床にポタポタと落ちていく。

それは潮と呼ばれるものだった。責め苦に、潮を噴いた本人が呆然とする。腹には何とも言えない違和感があった。渦巻くような余韻と、

足りない、という身体の訴えを無視したくて唇を噛む。

その僅かな息継ぎの合間に、その水分がすう、と引いていく感覚があった。

「……吸収……？」

相手は植物だ。水分であれば、取り込むこともあるのだろう。だが、これは。

白澤は戦慄する。

（餌にされるんじゃあ）

体液を吸収されているのだ、このまま干からびるまで餌にされ続けるかもしれない。急に、さつきから沈黙したままの相手が気になった。

ナニ、をされているのか。

「……っ、おいっ」

アホバカマヌケ、と息もつかずに叫んだが返答がない。身体中の目は塞がれたままである。

ごくりごくり、と白澤の潮を飲み干した蔓が再び動き出した。

「うぐっ」

全体が活性化されたようにバラバラの活動を再開する、胸に吸い付いた絨毛と龟头に張りつく絨毛はべったりと白澤の全てを取り込み吸り上げていた。

「んっ、ああつ」

快楽に痺れ、抵抗もできない身体の、腰が高く引き上げられる。

もう、申し訳程度に纏っていた腰周りの最後の布も裂かれて、拘束されている太腿を押し広げられた。柔らかな感触の蔓が、白澤の尻を割り開く。

ギク、と震えた。

秘めやかな窄まりに、ぬとぬとした大きな硬い、先端が丸い瘤状の何かが押しつけられていた。びと、びと、と狙いを定めるようにくつついては離れて、を繰り返している。

「い、」

唇が震えて、喉に言葉が張り付く。ここまでされて尻を狙われる可能性を考えなくもなかったが、明らかに入れられようとしているモノの太さが尋常じゃない。張り付いてくる感覚で、わかる。こんなに入らない。

頭が真っ白になっている内に、慣らされもしない閉じた直腸に、暴虐に大きな質量が押し込まれる。ごりつ、ぶちつと嫌な音がして、ぽっかりと胎が開いた。

「ぎい」

ああああつ、と悲痛な絶叫がコダマした。

攫われたのは業腹だが、車両内にそびえ立つ金魚草を見た瞬間、興味がそちらに向いた。こんな事例は見たことがない。好奇心を多大に擦られる。

それに多少は余裕もあった。どう転んでも相手は植物である。

緑の蔓に宙吊りにされた白澤をこんなエロ雑誌がありましたね、と眺めていた鬼灯は慌てる相手をつい、いつもの癖でからかいつつ、金魚草の幹に取り込まれてから感じる脱力感をどうかしようとしていた。よく見ると、幹の表面に透明な粘液状の液体がしつとりとまとわりついている。これに触れて、皮膚から吸収してしまつたための、痺れの発露だろうか。気づかぬ内に蜘蛛の巣に絡め取られた羽虫の気分で、鬼灯はムカムカと腹をたてる。

飛び込んできてしまつたとはいえ、金魚草に興味を持っていない白澤には特殊な進化を遂げた金魚草など関係のない話であるし、相手を逃がしてから観察を終えたら自分も逃げようと思

っていた。だがこれでは実行できない。理解不能だが、金魚草自体が白澤と鬼灯に並々ならぬ関心を持っているようである。

段々、降りてくる蔓の数が増えていく。白澤は攻勢を受けていて気づいていないが、周りに瘤を持った蔓や、食虫植物を模したもの、最早混ざり合ってしまったって原型を留めていない小さな金魚草達が舞い踊っている。

これは、良くない傾向だ。

そのうち本気で怯えた声が出て、一瞬のうちに白澤の鼻から上が半分、植物の中に包まれていた。パニックを起こす叫びに、グツと動かしづらい腕を引いて絡まっている幹を一部、引き千切る。

「白澤さ、……ぐつ」

相手を落ち着かせようと名を呼ぼうとした鬼灯の口に、横合いから太い蔓が内部へ向かって飛び込んできた。不意打ちに思わず噛み締めてしまう。

ぐんにやりとした感触の蔓から、ぶちゅつと生温い液体が飛び出てきた。薄甘いそれは舌に乗っただけで、不気味なビリビリ感を生んだ。

「――これは、」

痺れが徐々に伝播する。飲み込まないように

するための顎へ力が入らない。

白澤が必死に名を呼んでいるが、返事することとも出来なかった。徐々に顎の力が緩んで、どうしようもなくなった液体をダラダラとこぼしながら嚥下するしかなくなってしまった。

案の定、食道を通り過ぎる液体が腹に落ちると、全身の力が抜けていた。口腔の触手も引き、だらりと垂れ下がる上半身をさざわと湧いた蔓と蔦が幹の内側へ内側へ取り込んでいく。

両腕を絡め取られて、鬼灯は金魚草の下に磔にされていった。二の腕から下、腿から下は全て金魚草の幹の中に埋まっている。

(二重三重に、ですか、狡猾な)

鬼灯は見通しの甘さに臍を噛む。揺れる金魚草を睨んでも後の祭りであった。

つつつ、と白澤にも粘液を浴びせた蔓が近づいてきた。先ほどのとは形状が異なり、毒々しい赤が目立つ刺胞の針がついている。白い首筋に取りついたそれが、針から刺糸——棘を出す。ぶすりと鬼灯の血管に棘を刺しこみ、粘液を注入した。

抵抗もできずに眉を潜めてそれを受けとめた鬼灯は、胎の底から熾火が沸き上がってくるのを感じた。意思に反する、強制さで圧倒的な暴

虐さ。先ほど白澤が悶えていた理由が理解できる。分かりたくも無かったが。

熱くなる身体ともたげてくる下半身を意識から外して、動かない首をなんとか持ち上げて白澤を見上げる。

全身を色とりどりの蔦と蔓に取り憑かれた白澤は盛大に喘いでいた。この粘液を注入されて、責められたらひとたまりもないだろう。

ビクビクと背を震わせて、淫液を放埒している。それを白澤の陰部に取り付いている頭の大きな蔓が飲み干していた。

搾り取られ、呆然としていた白澤が急にわめきだす。

「……っ、おいっ」

アホバカマヌケ、と続いた心配と焦りの心に、応えられる声を鬼灯は持たない。

(……馬鹿だ)

目を封じられている白澤からは鬼灯の状態は分からないのだろう。ひとを心配している場合か、と鬼灯の口元が僅かに緩んだ。

その時突然、頭上の金魚草がぎゃああと叫んだ。同時に、樹木に鈴なりになっていた小さな金魚草の口から粘液が爛れ落ちた。

滝のような粘液は、逃れる術もない鬼灯に大

量に降り注ぐ。目を塞がれた鬼灯はなんとか下を向いてその奔流をやり過ごした。

無理やり濡れさせられたような音が遠くなった耳朶に、白澤の悲鳴が聞こえた気がした。

とろとろと、やはり着物が溶けて垂れ下がっていく。剥き出しになった肌に、蔦が張りついた。その細長いくだがめとめとと粘液を塗りつけてくる動きに、鬼灯は身動きした。ほんの僅かな刺激にも、敏感になっていてつらい。

ひたひたと顔面にも触れてくる、硬いなかの茎を首を振って退ける。しかし、髪に、角に、首筋に性感を高めるように擦り付けられる蔓や茎からは逃れることができなかった。

咽頭は麻痺している。

出せない声を絞りだそうと口を開けた鬼灯の舌に、それまでとは違う、硬いものがあつた。

なんとか粘液が落ち切った片目をあげると、目の前にぶら下がっているのは金属製の細長い管だった。電車の部品であつただろうそれが、開口器のように鬼灯の口唇を固定する。

(こんなもので……)

最早、この電車内は金魚草が制したエリア、腹腔の内側といっても過言ではなかった。囚われ翻弄され、いいようにされている。

蔓は感じやすい胸の先端を捉えた。

くちくちと、刺激に凝った尖がりをつつく。

粘液に濡れそぼって、衣服の残滓が絡まっただけになった下半身にも、下の幹から伸びてきた伸縮性のある蔓がくるくると絡まっていた。ひくひくと牽引する太腿を摩り、完全に立ち上がった鬼灯の屹立を撫でて、縮まった陰囊を優しく揉み込む。

力なく首を振り立てた鬼灯は、尻を割って身体内部に潜り込む、細い茎の感触を察知していた。

(やめつ)

「……っあ」

叫びたくとも咽頭の麻痺と開口器のせいで声は出ない。外に放出されない鬱屈に、細いといえど異物が体内を遡っていく違和感が追従する。人の指ほどの長さ、太さで鬼灯の胎内に潜り込んだ茎は、内壁を押し開く様に横にスライドした。その間隙を縫って、2本目が潜り込んでくる。

入り込んだ2本目は更に腹側の壁を押した。それが前立腺をかすって腰から衝撃が伝わり、鬼灯は仰け反って舌を出した。

抱かれることにも慣れている身体は従順に快

楽を拾って、その自身の身体のままならなにも腹の底から怒りが沸き起こっていく。

それでも固定された開けっ放しの口からは喉奥からくぐもった声が漏れるだけだった。

その喉に太い茎が忍び込む。じゅぶつじゅぶつと粘液と唾液を混ぜ込むように出し入れされて、鬼灯は噎せた。

咽頭の奥を性器のように無遠慮に使われて、視線だけは間違いなくすり潰すほどの圧力を込めて頭上の金魚草を睨みつける。

その視線を受けてますます興奮したように上下運動する主母体は、最早金魚草とも言えないような奇怪な音で一声鳴いた。鳴き声に反応したのか、小さな金魚草たち本体がバラバラと鬼灯の回りに振る。

粘液に塗れた鬼灯の皮膚に、べた、べたとくつつき、小さな口で吸い上げる。むず痒さに力なく震えるが、身体も上の口も下のクチも縫い止められていて逃れる術がない。

小さな金魚草たちは鬼灯の脇や胸筋の溝、薦に巻き付かれた頂きにも吸い付く。下腹部にも取り付いた。内側から押されている部分を上からも押されて苦痛に顔がゆがむ。

下の内壁を悪戯していた茎がゴリゴリと前立

腺を撫で押して、鬼灯は高ぶらされる余裕もなく一気に吐精した。

白い飛沫が腹に飛び散ると、それに群がるように金魚草が飛びつく。ばくばくと口を動かして、鬼灯が出したものを吸収していく。

(食われている、ようで)

いい気はしませんね、と荒い息をつきながら鬼灯は心の中で毒づいた。

白濁が全て小さな金魚草の腹に取まると、なかでも大きな一匹の個体が鬼灯の陰茎に食らいつき、口いっぱい包み込んだ。

牙はないが、ぬるぬるとした絨毛が沢山生えている腔内でしゃぶられて、くったりとした陰茎が残り汁を吹き出す。それを飲み込まれた。

鬼灯の眉がヒクつく。強制に搾精されているこの状態は、最早呵責に近い。全身刺激されすぎて感覚が遠くなる。

ぶれる耳に、白濁の泣き声混じりの嬌声が響いていた。盛大に喘ぐ質の相手を知っているが、自分以外の存在に鳴かされているのは気に食わない。

氣力を振り絞って振り仰ぐと、吊り上げられたまま力なくダラリと垂れ下がり、全身触手にとりつかれながら、秘蓄を凶悪なイボだらけの

太い茎にゴリゴリと擦られている姿だった。

突かれる度に宙に浮いている足先がぶらぶら揺れ、触手に吸い込まれた頭部の隙間から朱のピアスが半分ほど覗いていて共に揺れている。

「あ、あつ、ひぐつ……」

ぐちゅ、つと音がするごとに泣き声が漏れ、滴り落ちる体液は全て薦に搾り取られているようだ。

自身もひどい状態ではあるが、言い知れぬ怒りとどうしようもない劣情が湧き上がる。鎌首をもたげる鬼灯の下肢に、金魚草が喜んで食らいついていた。

白澤に氣を取られている鬼の目の前へずりと、先端が細く中程からポコポコと膨らみがある茎が現れた。ギク、と身体を強ばらせる鬼灯に関知せず、下に向かって潜り込んでいく。二本の茎に押し広げられていた窄まりに、なにかが添えられる感触がする。

口内の触手は外れたが幹に捕縛され金魚草が多数張り付いた動かない身体を必死で握って、それから逃れようと鬼灯は努力した。しかし、努力も虚しく、先ほど見た細い先端が胎内に潜り込んでくるのを感じた。

鬼灯は地獄で、この手の植物は嫌というほど

見ている。何をされるかも。

思わず目を閉じて宙を振り仰ぐ。

ごぶつと奥まで入り込んできた茎の先端が鬼灯の胎内で開いて、なにかが排出された。

（ぐつ……）

腸の奥に、固形の塊が茎の内部を迫り上がって入り込んでくる。閉じた腸内を広げ、そこに収まった。

その元々広がるはずもない場所を広げられる苦痛に落ち着く暇もなく、次々と内部に産み落とされてる。脂汗をかきながら、鬼灯は口を開けている開口器を噛み締めた。中で固形物同士がぶつかって、苦しさは倍増しになる。

腹が重みを増して膨らんでいく。腹筋に阻まれて妊婦ほどではないが、あからさまに膨らむ腹を頂垂れながら鬼灯は眺めていた。これは実だろうか。もしくは、種子。

ぶくんぶくと固形物を排出し終わった茎が蠢いて、重力でこぼれそうになる固形物をせきとめていた。腸内をゴリゴリと擦られて、異物が内臓を圧迫する。胃を下から押されて、嘔吐感が迫りあがった。開かれています口から僅かに胃液を吐いて、げほ、と鬼灯は呻く。その胃液すら、金魚草たちが舐めとっていった。

いつの間にか何本かの金魚草を残して口枷も外され、磔と下肢の茎を残して鬼灯は解放されていた。たつぷり実が詰まった腹が重い。その代わりといえはいいのか、痺れ薬の効果が薄れてきたのか舌が動いた。ここまでの長らくの苛立ちを込めて、大仰に舌打ちをする。

鬼灯から少し離れた場所で吊られていた白澤が、ゆるゆると降ろされ近づいてきた。尻にずつぽり埋まっていた茎がぬぶん、と抜ける。

あう、と精根尽き果てた白澤が微かに呻いた。

「……生きてますか」

呼ばわった声は、鬼灯らしからぬ、掠れたものだった。

「……なんとか」

酷い目に、あつたよ、と途切れ途切れに返答する白澤の声も爛れている。

縛られている腕と胴を残して白澤もやつと解放された。ずっと絨毛に吸われ続けていた頭と陽根と両胸が白くふやけている。ベタベタになった髪の毛の隙間から歪んだ朱の目の紋様が覗いていた。ふやけた睫毛を震わせて両目を開け

た白澤は瞬きを繰り返した。

ぼんやりしていた風景から通常に戻るまで慣れた頃、やっと鬼灯と目を合わせる。そして礫になった状態と膨らんだ腹を一瞥して、ひとつ新たに瞬きをした。

「——オマエを孕ませるのは僕だと思つてたのに」

「孕みませんよ、馬鹿ですか。——百歩譲つて私がお前を孕ませるなら認める」

「そんなこと言つたつて、現状は、なあ……んっ」

軽く呻いた白澤の太腿に、粘度の高い液体がとろとろと伝つていった。巨大な質量に押し広げられていたため、閉じぎらない孔から粘液がこぼれ続けている。一匹の金魚草が白澤の脚に取りついて、その粘液を吸った。声もなく震える白澤を、鬼灯が下から呼んだ。

「はくたくさん」

出来る範囲内で身体を伸ばした鬼灯に呼応して、白澤も精一杯鬼灯に近づく。傾けた顔の鼻先が触れ合った。もう少し、と伸びて、やっとお互い慣れ親しんだ唇に辿り着く。ちゅうと軽く食み、舌先を伸ばした。舌を絡めるにはあと少しが届かない。

軽い羽根のようなキスを交わしているふたりの足元で、白澤に挿入していた凶悪な様相の茎が、粘液と白澤の血と体液をまとわりつかせたまま、ずず、ずず、と移動していた。根元の幹を伝つて、鬼灯の足元に近づく。

それを流し目で確認した鬼灯が白澤から離れようとしたが、舌先を白澤が噛んで離さなかった。じつとりと睨みつけるカガチの視線も、上弦の月のような柔和な睨みが流してしまふ。

やがて鬼灯の下肢にたどり着いた茎は、栓のように鬼灯の後孔を塞いでいた固形物を産み付けた茎の横から、パンパンに膨らんだ胎内に潜り込んだ。

「ぐ、……うう」

押し上げてくる内蔵と異物に、再び鬼灯は嘔吐した。全開まで広げられた後孔から、黒い卵大のモノがこもり、とひとつ落ちる。

巨大な茎の疣に擦られて、苦悶しながら喘ぎを漏らす鬼灯の舌を噛みながら、白澤は確認した。鬼に産みつけられているのはやはり何かの種子であろう。もしかしたら、金魚草の。

金魚草はまだどうやって増えるか完全には判明していない、地下茎で増えるとも言われていたが、種子である可能性も出てきたわけだ。つ

まり受粉現象も、有り得る。

「あ、あ、あ、うぐっ……が、ああ」

ずぼずぼと音が鳴るほどこじ開けられ、突き上げられて、逼迫した悲鳴をあげる鬼灯の腹の表面がゴロゴロと蠢く。種子ごと突き上げているのだから当然であろう。

叫ぶ鬼灯の頬や目元にキスの雨を降らせていた白澤は、自身の下肢に触れるねっとりした感触に気づいた。先程まで鬼灯に吸い付いていた沢山の小さな金魚草が、白澤の下肢に溢れる粘液をしゃぶっている。それと、下から、大きなウツボカズラに似た壺型の捕虫袋が差し迫っていた。それらが下肢にまとわりついていたらしい。

金魚草が体液を求めて、白澤の立ち上がりかけた陽根にとりつき舐める。まだ粘液をこぼし続けている後孔に、一匹の金魚草が身体をねじ込ませた。

「んっ、あつ、あつ、あうん……っふ」

まだ疼きが止まない秘部に、無遠慮に奥まで入り込んでいく。金魚草の赤い鶏冠部分がゴリりと前立腺を擦って、身を振った白澤は鬼灯から唇を離してしまった。種子と疣茎に苛まれながらそれを察知した鬼灯の唇が白澤のそれを追

う。再び唇を絡め合わせたふたりは、お互いの喘ぎを吸り合った。

「んあつ、あ、やだつ、そこ、あ……」

「あう、あ、あ、も、……」

「あ、はうつ、ああ、ほおずき、ほおずき……」

「はくた……、ぐつ」

舌を舐めあう途中で鬼灯がイヤイヤと被りを振った。疣茎のピストンが激しくなり、間隔が短くなる。

ハッハッと短い呼吸を繰り返す鬼灯の口を塞いだ白澤のそれが、苦しさに耐えかねた鬼の牙に食い破られた。金魚草に腹を探られながら、口の端から血を流した白澤は艶然と笑う。

揺さぶられつつ僅かに液面を作った鬼灯も、最後とばかりに奥深くまで潜り込んだ疣茎の一番撃を受けて、切れ長の瞳が白目を向いた。

「あ……、……」

どくり、と鬼灯の腹の中に白濁した粘液が送り込まれた。種子で膨らんだ内側が粘度の高い液体で満たされていく。

事を終えて、ずず、と音を立てながら、疣茎が鬼灯の腹から引いた。ぽっかり空いた尻穴から、白濁した茎汁とそれに塗れた黒い種子がこ

ぼりと落ちた。

「ん……、あ、ああ、嫌です、イヤ、……だつ」

決壊するのは早かった。

栓がなくなり、滑りが良くなった腸内を種子たちが詰め込まれた分、性急に滑り落ちていた。連続する抗えない排泄感にビクビクと背を震わせながら、鬼灯は卵大の種子を産み落としていく。

痙攣する相手を眺め、自身も薦と金魚草に苛まれながら、白澤はふと柳眉を寄せる。

下から差し迫っていた巨大なウツボカズラの口が開いた紅色のネバネバする内側に、ずるんと右足が取り込まれていた。

途端にズクズクと右足が痒みを帯びた。表皮が、溶けていく。肉に達すると、それはなんともいえない痛みが変わった。

今度こそは衣服では無しに、白澤自身を融解している。どうやら、ウツボカズラの内部は酸に満たされているようだった。

左足で蹴り飛ばしてみるが少し表皮が歪んだだけで、効いているのか効いていないのかそれの上昇は止まらない。植物であるし、痛点などないのかもしれない。

諾々と白澤を飲み込んでいく。取りついた金

魚草諸共、小さな悲鳴を上げさせながら溶け崩していく大きな増殖は、既に右足の太腿、左足のふくらはぎ付近まで進行している。

既に足先の感覚は全くなかった。それどころか重みすらない。最早、痛みも感じない。不協和音のような心地よさだけが、ぽつんと残されていた。

そう、取り込まれ、飲み込まれていく程、言い知れない多幸感が白澤を見舞っていた。ウツボカズラの酸の中に、例の快楽を高める粘液が含まれているのだろうか。この肉の厚い植物の内側はほのかに暖かく、花のような芳香がする。暗い秘密の水に包まれて、溶かされいく。

白澤は母など知らないが、赤子が胎内で感じる幸福に似たもののだろうか。

「……は、」

じゅわじゅわと腕と胸を拘束していた蔓も溶けて、恐ろしい植物に胸まで浸かった白澤は、伸び上がって、未だヒクヒクと痙攣して意識を飛ばしている鬼灯の角にキスを送った。

いつもの笑みを浮かべると喉を逸らし、後頭部から倒れこんで自ら虚の内側に落ちていく。

トブン、と小さな水音がした。

白澤を収め終わったウツボカズラは、大仰に、

その上部に付いていた蓋状の葉をボタンと閉めた。

しばし、辺りは静かになった。

最後のひとつまで腹に溜まった種子を産み落とし終えた鬼灯は、瞬きをして正気に返る。ふ、とため息をついた。

そして、今まであった温もりの不在に、肌寒くなった。顔をあげて振り仰ぐ。

鬼灯の前には今まで居た白澤ではなく、大きなウツボカズラがひとつ、鎮座していた。

稚い仕草で不思議そうに小首を傾げて、その腹がふくらしているウツボカズラをゆったりと眺める。

そして、鬼灯は首を伸ばし、目を閉じて、ウツボカズラの表面に口づけた。

つるりとした、その緑を舐めて、口の端が微かに持ち上がり、鬼の牙が覗く。

遊びは御終いですよ。

「——あ、そうお？」

こぼこぼこぼ、と水音を鳴らして。ウツボカズラが、そう、応えた。

その一言で、鬼灯を拘束していた幹が、ビキッと音をたてた。爪が伸びた腕が茶色の固い皮を割り裂く。大人しくしていた金魚草が、今までにない甲高い雄叫びをあげた。

メキメキと鬼灯の鼻面が伸びる。全身から黒い毛が生えてきて、ふつざりとかわった四肢が変わり始めた。巨大な鉤爪を持った四つ足の獣が、木っ端をまき散らしながらのっそりと姿を現した。

木の屑がついている背中をぶるぶると振って、その巨大なその獣は、対比で小さくなったウツボカズラを見下げた。

その膨らんだ縁に向けて大きく牙が生え揃った口をかばり、と開けて、横から食いちぎった。横つ腹が穴の開いたウツボカズラから、どろりと中身が床に零れ落ちる。とろとろと粘液と、崩れ落ち溶けた塊が混じり合っていた。鬼灯は、それを何も言わず見守る。

そのひとかたまりが、揺ら揺らとさざなみを立てる。歪み、煙り、空気に滲んだ。

そして唐突に、白い質量が膨れ上がる。

カツ、と床に蹄を鳴らして顕現した白澤は、まるで何事もなかったかのようにヒトカケラも濡れていない鬣をふわりと振った。

「——白澤さん、」

ゆるりと白の獣の口元が三日月に引き上がる。
「はー、つつかれた」

茶番はもうおしまい？

どこか掠れた声がそう述べると、白い神獣の番である黒い獣が、降ってくる蔦を踏み潰しながら頷く。

「途中からやる気無かったですよ」

「だってもう面倒になつて」

気持ちよかつたから、されるがままでも良かったんだけど。

べき、と白澤の足元で幹が折れた。板張りの床が割れて、その下に這う根も同時に潰される。

隣では鬼灯が纏めて、うねる蔦を食いちぎっていた。粘液を散らしながらぶちぶち引き千切られた蔦や蔓が、床にばらまかれる。先端についた小さな金魚草たちがピチピチと跳ねていた。

末端から解体され、削られて折れていく幹の上で主母体の金魚草が断末魔の叫びをあげる。

残りを白澤に任せて鬼灯は伸び上がった。金魚草と向き合い、睥睨する。

金魚草の動きが止まった。初めてその狂気の瞳に、一縷の恐怖が過ぎる。満足したように鬼灯はひとつ首を傾げて、かばりと口を開ける。

恐怖を浮かべていた金魚草に、変化が現れた。

うつとりと、恍惚の表情に変わる。その頭に、黒の獣の眞白な牙が、ゆつくりと突き立てられた。

「なかなかいいアトラクションでした」

「お前はそうだろうな！ 僕はもう疲れたよお、後で金丹飲も、金丹」

完全停止した電車から抜け出して、何事もなかったかのような穏やかな天国の空を飛びながら、白黒の番は離れてしまった荷物を置きっぱなしの駅を目指していた。どの道、服は粘液に溶かされてしまったので人型には戻れない。この姿のまま荷物を受け取り目的地に行つて、どこかで着替えるしかない。

白澤は長い鼻面をあげて、ふふんと鼻を鳴らした。

「感謝しろよな、全裸で戻らなくて済むでしょ」
「事実ですから客かでもないですけど、なんかムカつく」

ドヤ顔の白澤を、鬼灯はどちらかといえば毛並みがシャープな尻尾でピシッと叩いた。痛い痛い逃げた白澤は、空中で一回転する。そして、またピタッと黒の獣の隣についた。そしてそつと囁く。

「ところでお前、あの種子持ってきたら」

涼しげに風を受けて空を飛んでいた鬼灯の、雰囲気は僅かに変わる。

黒い毛並みに隠れた貌は、傍からは表情が見

分けがつかないが、番である白澤には驚いてい
ると理解できた。

「……バレましたか」

「何に使うんだよそんなもん」

「まあ、面白いものではありませんので」

「物好き」

若干肩をすくめて、白澤は僕はもう懲り懲り
だよ、と言った。

「やっぱりセックスするのはお前がいい」

「奇遇ですね、私ですよ」

「不本意だけどな」

「諦めも肝心ですね、こればかりは」

「じゃあ、また後で。」

ダメージを感じさせない白と黒の神の獣の番
は、じゃれあいながら飛ぶ。

下方には元の駅が見え、右往左往している駅
員たちと、ふたりの荷物を脇に置いた、例の帽
子を目深にかぶった運転士が手を振る姿があっ
た。

のちに、とある地獄の補佐官が個人的に所有
している孤地獄区画の片隅に、外から見えない
ように囲われた小さな花壇ができたという。

終わり



おぞましい触手による 陰惨な凌辱の数々

這い回る機械・不可解生物・蟲・植物

問答無用の拡張・苗床・産卵狂乱汁濁

閉鎖された電車内に2人の悲鳴が木霊する

